

若者たちに技術屋の夢を託す

堀 場 厚



私は子供の頃から模型や乗り物に興味をもち、ごく自然に祖父や父の選んだ専門と同じ理学部の物理に進み、仕事も父の創業した堀場製作所の米国子会社に就職した。父の会社であるということだけではなく、自分の最も興味があった分野である「分析」にかかわる仕事ができるという魅力が入社の大きな動機となった。米国では仕事をする上で必要性を強く感じた電気工学の知識を得るためにカリフォルニア大学の工学部に編入したが、専門分野に加え優れた教授や素晴らしい教育システムに出会い、多くの事を学ぶことができた。今でも卒業論文を見てくれた教授や、大学時代のクラスメートで、今では世界をリードする半導体企業の副社長に就任している親友とは公私共々の親しい付き合いをしている。その継続する親交の中で「科学と技術」という共通の興味が大きな役割を果たしていることに大きな幸せを感じている。

最近の日本の子供たちの理科離れはよく耳にするところだが、大変残念なことだと思う。これからますますグローバル化していく社会の中で、世界に比べて日本の子供たちの学力が相対的に低下しているばかりでなく、海外にチャレンジしていく日本人留学生も減少するなど、日本の将来を担う子供たちや若い人たちの教育環境の悪化に危機感を持つようになった。

近年、理科系の学生数が減少しているともいわれており、また理科系を卒業した学生がもの造り企業に就職するのではなく、金融や証券などの業種に仕事を得るケースも多いと聞く。この傾向は子供たちの「理科離れ」と無縁ではないと感じるが、これは学生や子供たちが、もの造りや理科に興味を失っていることが原因なのではなく、興味深く科学を学べるような教育システムになっていないことこそがその原因ではないかと思う。このような現実に対して、『化学と分析』をその生業とする日本分析化学会の皆さんや我々のような研究開発やそれに携わる技術者を誇り、重視する企業が手を携えて行動するときが来ていると感じる。

ところで現在の100年に一度の世界経済の負のスパイラルを体験している我々は幸せか不幸せか、と考えることがある。経営者としては当然ながら好んで経験したくないものに違いない。しかし、業績が過去最高といえる状態から未体験ゾーンへ急降下することは、これを上手く利用すれば次の大きなステップへのエネルギーの蓄積にもなりうるのではないか、物理的にいえば最も高い所から最低地点に向けて急降下したコースターには圧倒的な加速が付いていて、再び次の頂点に向けて駆け上がるはずである。世界経済もそうならないか、あるいはそうなることがごく自然な原理ではないか、などと考えるのは技術屋的発想なのだろうか。残念ながら過去の経済の歴史を振り返ると、急落は必ずしも急回復につながらないのも事実であり、不思議でもある。やはり技術屋的発想は万能ではないのかもしれない。

いずれにしても「ベースや中心軸」がドリフトしている現状では打つ手がないと思わざるを得ないが、ここで大切なのはとにかく「Do the best」の精神だと確信している。

「ものづくりとシステムの構築」に携わってきた技術屋の、地味ではあるが着実に一歩ずつ前進する「姿勢」と「精神性」は、教育改革や経済回復が必要なこの社会にとって今一番求められるスピリットではないだろうか。

〔Atsushi HORIBA, (株)日本分析機器工業会会長〕